

菅野博史氏の発表論文に対する コメント

徐 文 明*

(中国 北京師範大学)

光宅法雲(467-529)は梁代の三大法師の一人で、開善智藏、莊嚴僧旻と名声をひとしくした。一般には、三大法師は南方の成実師の代表的人物と認められているが、実際には彼ら三人はみな経論に精通し、博学多識の大家であり、その学問はけっして成実学に限られるものではない。三大法師にはそれぞれ特長があり、法雲は『法華経』によって抜きん出ており、「作幻法師」と呼ばれ、当時最も影響力のある法華学者であった。

菅野博史教授の論文は、法雲の『法華義記』を主な資料として、法雲の『法華経観』に対して系統的で精緻な整理を行なったものである。

第一に、菅野教授は、法雲が『法華経』の分科に対して重要な貢献があり、[『法華経』の分科]の創始者であるはずであり、かつ[分科が]十分に詳しいこと、後世の吉蔵などの人の分科は法雲の影響を受けていることを指摘した。

第二に、法雲の教判思想は、南北朝時代に最も流行した慧観の頓漸五時教判の影響を受け、『法華経』を第四時同帰教と判じた。『法華義記』の中には、「五時経教」という表現があり、あわせて「五時の経の名称として、有相教、『大品般若経』、『維摩経』、『涅槃経』、『法華経』の名が出る」とある。その中で『涅槃経』を常住経として五時の最後の段階と見なし、『法華経』は「則ち涅槃の前路を開き、常住の由漸を作し」、その地位は明らかに『涅槃経』の下に位置する。

第三に、法雲は『法華経』の一乗思想に対して非常に重視し、権実二智と因果論によって、三乗と一乗との関係を解釈し、三乗は権で、一乗は実であること、三乗は三因三果で僞であり、一乗は一因一果で妙であることを指摘している。

*北京師範大学哲学与社会学学院教授。

第四に、法雲は『法華経』の仏寿無量、久遠積尊の説に対しては決して重視せず、このような寿命の延長は有限の基礎の上に長さを延長したものにすぎず、けっして真正の無限ではなく、これによって寿命は久遠ではあるけれども、やはり無常に属すと考えた。『法華経』の中の法身は実には応身であり、このような説き方は『涅槃経』の法身常住と異なり、その地位はまた『涅槃経』より低い。

次のようなことを見いだすことができる。法雲は『法華経』に対して豊かな研究をしたけれども、それを最高の地位に置かない。この点は、後代の天台宗がこの経を根本の経と見なし、最高の位置に置いたことと明らかに区別があり、法雲の『法華経』に対する分析は比較的客観的である。

『法華義記』が『華嚴経』にまったく言及しないという問題に対して、菅野先生は「これは法雲が『華嚴経』をその教判思想の中に組み込んでいないことを意味する」と考えている。この説にはさらに検討する余地がある。次のような推測ができないかどうか。法雲は教判の面で慧観の影響を大いに受け、ほとんど完全に彼の説に従ったのであるが、慧観の教判体系の中には、『華嚴経』は頓教に属し、最高であり、いわゆる「日、高山より出でて、先に『華嚴』を照らす」のであり、『華嚴経』は唯一の頓教を代表する経典である。したがって、漸教の五時について討論するときには、頓教の経典としての『華嚴経』に言及する必要はない。

要するに、菅野博史教授の論文は大変深く、啓発的であり、さらに『法華経』思想の変化発展とその影響を研究するのに対して価値が大きく、また南北朝仏教の研究を推進するのにも役立つと思われる。

(翻訳担当：菅野博史)